国立極地研究所
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
南極・北極科学館
Polar Science Museum

昭和基地最後の犬「ホセ」

おじさんブルと甥っ子ホセ

1962 年、第 6 次隊によって昭和基地は閉鎖され、日本の南極観測は終了しました。その約 3 年後、南極観測は再開。第 7 次隊が昭和基地に向かう際、2 頭の犬が南極観測船「ふじ」に乗り込みました。ブルとホセです。

【ホセ（左）とブル（右）】

【生後 3 週間のベルジカ】

ブルは、第 4 次隊（1959～61 年）がベルギー隊からもらったハスキー犬ベルジカの子です。ブルにはきょうだいがいて、そのきょうだいの子がホセです。つまりホセから見るとブルはおじ（ブルから見るとホセは甥）でした。

ブルは第 10 次隊の 1969 年 4 月 12 日に死に、その後、ホセはたった 1 頭で昭和基地で過ごしました。

ホセは隊員たちからかわいがられていました。人間用の食べものを与えられていたため、ドックフードはあまり食べない美食家だったそうです。

第 16 次隊から第 17 次隊に交代する頃の 1976 年 2 月 12 日に、ホセは老衰で死にました。ホセの死後、犬を昭和基地に連れて行くことはなくなりました。

※ブルとホセは兄弟という資料もありますが、国立極地研究所アーカイブ室、南極・北極科学館では、おじと甥説を取っています。

【ホセの葬儀】

ホセとの越冬の思い出

第 13 次越冬隊員・村山治太氏

第 13 次隊に参加して初めて昭和基地を訪れた 19 72 年 1 月、基地には犬が 1 頭だけ、ペンギン保護のために長い鎖で繋がれていました。11 才のおとなしい老犬で、ドッグフードの山を横目に、拗ねた顔で伏せていました。近寄っても知らん顔でしたが、生肉を持って行くとしっぽを振って喜びました。夏が終わり、ペンギンがいなくなると鎖をはずしましたが、トイレタイムの時以外は、気象棟前の通路に居ることが多かったようです。越冬二度目の隊員ゴンさんが昔の曳き綱で、小さい橇を曳かせようとしましたが、空の橇でも曳きませんでした。鳴き声を聴いたこともありませんでしたが、第 1 便のヘリコプターの音が聞こえた時、遠吠えに似た声を出しました。

【村山氏とホセ】

第 14 次越冬隊員・白石和行氏

僕が初めて南極に行ったのは 1972 年の 12 月です。それから 1 年余り、主に昭和基地で過ごしました。昭和基地にヘリコプターで降り立ったとき、そこに犬がいるのにビックリしました。ホセはとても偉そうにしていました。僕は隊員のなかでも年少のグループだったせいか、ホセは僕のことなど眼中にないかのように悠然と歩き回っていました。ブリザードの日も、たいていは外で雪まみれになりながらうずくまっていましたが、さすがに真冬の零下２０～３０度にもなると足の裏が冷たいらしく、かわりばんこに 1 本の足を持ち上げて 3 本足で立っていたのが印象に残っています。明るい間はよく島の中を巡回しているようで、僕が地質調査のために基地の外を回っていると、柔らかい雪の上のあちこちにホセの足跡がありました。ホセの食事は調理隊員の仕事でしたが、栄養の為にビタミン剤を肉の間にはさんで差し出すと、口のなかから錠剤だけを器用にペッペと吐き出していました。

仲間の犬のいなかったホセは寂しそうでした。我々が去ってから 2 年後に老衰のために基地で死にました。それから更に 4 年後、僕は再び昭和基地に行ったときに彼のお墓参りをしました。

※現在は環境保護のため、南極への動植物の持ち込みは禁止されています。